

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (1/5)

学部・学科	総合社会学部・総合社会学科	職名	教授	氏名	エンドウ ヒサシ 遠藤 央
学歴	昭和56年 3月 国際基督教大学教養学部社会科学科卒業 昭和60年 3月 東京都立大学大学院社会科学部研究科 (修士課程) 社会人類学専攻修了 平成 2年 9月 東京都立大学大学院社会科学部研究科 (博士課程) 社会人類学専攻単位取得満期退学 平成13年 2月 博士 (社会人類学 博第71号) 東京都立大学大学院社会科学部研究科				
学位	昭和60年 3月 文学修士 (東京都立大学) 平成13年 2月 社会人類学博士 (東京都立大学 博第71号)				
専門分野	東南アジア・オセアニアの社会人類学、家族・ジェンダー論、帝国研究				
専門資格					
所属学会	昭和57年 4月 東京都立大学社会人類学会 昭和58年 4月 日本オセアニア学会 評議員・理事 (情報化担当) 「平19.4-平21.3」、評議員・理事 (英文学会誌編集担当) 「平23.4-平25.3」、「平成25.4-平27.3」 昭和60年 4月 日本文化人類学会 (旧日本民族学会) 昭和60年 6月 比較家族史学会 平成16年 4月 日本国際文化学会 (会計監査「平22.4-24.3」、常任理事「平25.4 - 平27.3」)				
受賞					
担当授業科目	学 部 総合社会学基礎演習、総合社会学演習 ・ 、文化人類学演習 ・ 、卒業研究演習 ・ 、グローバル化論、家族・ジェンダー論、ガバナンス論、外国語専門書講読 大学院 フィールドワーク、文化人類学基礎研究法演習 ・ 、文化人類学研究法演習 ・ 、地域文化研究 (オセアニア研究)、地域文化研究演習 (オセアニア研究)				
論文指導	論文指導担当 [主査] (卒論 : 1名) 論文指導担当 [副査] 該当なし				
F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名	科目カテゴリー	実施学期	履修者数	
	家族・ジェンダー論	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験	春 ・ 秋	102 名	
授業の概要：写真や映画、広告にみられるジェンダー表現の分析を導入に、『ジェンダーで学ぶ文化人類学』の各章を講義する。性を規定する要素を法・社会的要素、身体的要素、心・脳的要素、親の関与などその他の要素にわけて考察することで、ジェンダー、セックス、近代・現代家族の相互関係を理解することを目指す。					
教育活動の振り返り 教育活動の成果： 授業の最初出席カードを記入させ、さらに教室後ろのドアを閉鎖し、出入りできないようにし、遅刻をしないように指導を徹底した。 毎回講義の最後の10分ほどをコメント・質問を書く時間とし、A、B、Cの三段階で評価し、次回に返却・回答した。これにより、講義の進行につれて、コメント・質問の内容が格段によくなり、C評価がほぼなくなった。その結果、定期試験でも秀・優評価の答案の割合が増加した。 また最終回に、ノートやプリントの内容をまとめた手書きのメモを作成するようにキーワードをあげて指示しているが、それによりすぐれた答案を書く学生が確実に増加した。 今後の課題： 授業には出席しているが意欲の低い学生や講義内容の理解度が低い学生への対応をどのようにするかが課題である。					

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (2/5)

<p>F D 活 動 ・ 教 育 実 績</p>	<p>・学内外のFD 関連講演会/セミナー等への参加実績 特になし。</p> <p>・教育効果が高い、あるいは教育の一環として行われている課外活動等 日本国際文化学会第13回全国大会のフォーラム「文化は地域や世界に希望をもたらすか？文化創成コーディネーターの可能性と教育カリキュラム」(7月6日、山口県立大学)に本学卒業生(現研究生)で文化コーディネーター資格を取得した佐藤志穂とともに参加した。佐藤が中国への短期留学にもとづいて、日本と中国を文化的に結びつける活動を報告し、それに対してコメントを加えた。龍谷大学、法政大学、青山学院大学、佐賀大学、プール学院大学、山口県立大学からも国際文化学などを専攻する学生がそれぞれの活動を報告し、教員がコメントするという、活気のあるフォーラムとなった。</p>
<p>H26 年度 研究課題</p>	<p>1. 日本を含む外来権力の重層下で形成される歴史認識 台湾と旧南洋群島の人類学的比較 (継続) 2. グローバル・ガバナンスの人類学的研究 (継続) 3. 「旧世界」と「新世界」の出会い方を出発点とするグローバリゼーションの歴史人類学的研究</p>
<p>平成 二 十 六 (2014) 年 度 の 研 究 活 動 の 概 要</p>	<p>平成22年度から平成25年度にかけて参加した基盤研究A「日本を含む外来権力の重層化で形成される歴史認識 台湾と旧南洋群島の人類学的比較」の成果執筆をおこなった。 6月に2日間の日程で研究会を開催し、各自の発表に対し、台湾研究者とミクロネシア研究者各1名がコメントを加えた。遠藤は「委任統治、信託統治と「日本」と題する論文を発表した。その後、書き直しをおこない、今年度末にとりまとめの作業にかかる予定である。 太平洋諸島学会第2回研究大会に参加し、2本の発表の司会とコメンテーターを務めた。また、日本オセアニア学会関西地区例会にも参加し、1本の発表のコメンテーターを務めた。 また、「境界人との植民地的邂逅から構築されるポスト植民地社会に関する帝国日本の歴史人類学」という研究計画を作成し、基盤研究A(海外学術調査)に応募中である。</p>
<p>平成 二 十 六 (2014) 年 度 の 主 な 研 究 成 果 等</p>	<p>(著書) 1. 「出稼ぎする人びと」「パラオの女性が強いわけ」「人びとをつなぐパイ(集会所) 伝統と現代」、共著(当該箇所担当) 平成27年2月、明石書店、『ミクロネシアを知るための60章』(第2版)(pp.151-154,249-252, 253-256)</p> <p>(論文) (学会報告、学会活動) 1. 研究発表 : 河野 正治氏(筑波大学)「国家の中の称号制度 ミクロネシア連邦ポンペイにおける『名誉』の論理と実践」・研究発表 : 鴻巣 玲子氏(横浜国立大学)「フィジーにおける伝統的ガバナンスの 1形態 大首長会議(GCC)の位置付けとその機能」(司会、コメンテーター)、平成26年7月、太平洋諸島学会第2回研究大会、早稲田大学早稲田キャンパス 2. 日本オセアニア学会関西地区研究例会 2014年11月15日(土) 国立民族学博物館において、2014年度日本オセアニア学会関西地区例会が開催された。今回の例会では来日中であったオレゴン大学のフィッツパトリック氏にも発表をいただけることとなり、学会員2名を含む計3名による英語発表が行われた。発表に続いて、各コメンテーターによるコメント、フロアからの質疑が寄せられ、活発な議論が展開された。発表者、発表題目、コメンテーターは下記の通りである。 発表者: Scott M. Fitzpatrick (University of Oregon) 発表題目: <i>Life and Death at the Chelechol ra Orrak Rockshelter : 3000 Years of Occupation in Palau, Micronesia</i> コメンテーター: 印東道子(国立民族学博物館)</p>

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (3/5)

平成二六(2014)年度の主な研究成果等	<p>(学会報告、学会活動 つづき)</p> <p>発表者：飯田晶子(東京大学)</p> <p>発表題目: <i>Environmental Impacts on the Babeldaob Island of Palau under Japanese Administration</i></p> <p>コメンテーター：遠藤央(京都文教大学)</p> <p>発表者：石村智(奈良文化財研究所)</p> <p>発表題目: <i>Cultural Heritage under Threat of Negative Impact from Climate Change: Cases in Tuvalu and Kiribati</i></p> <p>コメンテーター：野嶋洋子(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)</p> <p>フィッツパトリック氏の発表では、パラオのオラック島における発掘調査から、そこで発見された今から 3000~1700 年前の埋葬人骨、また動物骨や共伴した人工遺物についての報告がなされ、それらが示すパラオの人口と社会の変化についての考察が展開された。続いて飯田氏は、日本統治時代のパラオ、バベルダオブ島の農地開拓とポーキサイト採掘などの開発によって、原生熱帯雨林の伐採や土壌浸食という、環境への長期的かつ重大な影響が生じた点を指摘した。また土地利用や植生に基づく詳細なデータから、伝統的集落の景観分析についての報告もあった。石村氏の発表では、ツバルとキリバスの事例から、気候変化による負の影響は、土地や景観といった有形文化遺産だけでなく、伝統的農業や食物などの無形文化遺産にも及ぶことが報告され、こうした影響を総合的な見地から考察することの必要性が指摘された。</p> <p>コメントおよびディスカッションでは、考古学や都市工学など多様なアプローチから提示されたデータについて、より詳細な質疑が行われただけではなく、歴史的、文化的視点からの分野横断的なコメントもなされ、包括的かつ濃密な議論を行うことができた。</p> <p>3. 日本オセアニア学会英文誌編集担当理事として、<i>People and Culture in Oceania</i> vol. 30の編集を担当し、論文6本の査読、改稿作業を担当した(平成27年3月初めに刊行)</p>
	<p>(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)</p>
	<p>(調査活動)</p> <p>平成27年 2月 神戸市立中央図書館青丘文庫における旧外地関係資料の閲覧など、旧外地に関する史料を収集した。</p>
	<p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)</p> <p>(学内活動)</p> <p>自己点検・大学院委員会委員、入試委員会委員、「人を対象とする研究」倫理審査委員会委員長</p>
社会における活動(平成二六(2014)年度の)	<p>・ 平成26年6月 佛教大学通信教育課程スクーリング講師(「文化人類学特講3」)</p>
平成二一~二五(2009~2013)年度の主な研究成果等	<p>(著書)</p> <ol style="list-style-type: none"> 『オセアニア学』、共編著、平成21年10月、京都大学学術出版会、監修：吉岡政徳、共編者：印東道子他、592p 「出自と母系制」、共著、平成24年5月、時潮社、河合利光編著、『生命継承と親族』(pp.75-97, 251p) 「脱植民地期パラオにおける公共圏の問題系 ミクロネシア・沖縄問題の設定に向けて」、共著、平成24年12月、昭和堂、柄木田康之・須藤健一編、『オセアニアと公共圏 - フィールドワークからみた重層性』(pp.189-202, 274p) 「イ工概念の再検討」、共著、平成25年2月、風響社、小池誠・信田敏宏編、『生をつなぐ家親族研究の新たな地平』(pp.55-70, 342p)
	<p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> Hisashi Endo 2009 "The Location of Ethnicity and Spatial Segregation in Metropolitan Area, Malaysia" in Toh Goda (ed.), <i>Urbanization and Formation of Ethnicity in Southeast Asia</i>. Manila: New Day Publishers. pp. 146-158.

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (4/5)

(論文 つづき)

2. 第 部 植民地化と近代化「総論」、共編著、平成21年10月、京都大学学術出版会、オセアニア学 (pp.295-303)
3. “The beginning of the ‘Postwar Period’: Japan and the United States of America as Un-decolonized Alien Powers to Micronesia (Nan’yo gunto)” paper read at Academia Sinica, Taipei, on December 28, 2010, 9p. 科研シンポジウム「外来権力(含日本)多層累積形成的歴史認識」台北研究会、中央研究院民族學研究所
4. The Beginning of the ‘Postwar Period’ Japan and the United States of America as Un-decolonized Alien Powers to Micronesia (former Nan’yo gunto)、単著、平成25年3月、京都文教大学 総合社会学部研究報告第15集 (pp.1-9)

(学会報告、学会活動)

1. 平成21年度 国際文化学会 会計監査担当
2. 平成22年 4月-平成24年 3月 日本国際文化学会 会計監査
3. 平成23年 3月-平成25年 3月 日本オセアニア学会評議員、理事(英文学会誌 People and Culture in Oceania編集担当: 論文査読者の選定、査読後の訂正、英文校閲など)
平成24年度 第28巻を無事に出版することができた。(論文、コミュニケーションあわせて4本を担当)
4. 報告2: 飯高伸五(高知県立大学)「ミクロネシア・パラオ諸島における太平洋戦争の記憶のせめぎあい」(コメント)、平成23年10月、日本文化人類学会中四国地区研究会第36回、広島大学
5. 発表題目: 紺屋あかり(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科)「言語芸術の継承 ベラウ古典歌謡の事例から」(コメント)、平成23年12月、日本オセアニア学会2011年度関西地区研究例会、京都大学
6. 平成23年 4月-平成25年 3月 日本オセアニア学会 評議員・理事(英文学会誌編集担当)
7. 分科会「台湾とパラオにおける植民地経験 接触領域にみる「日本」」(コメンテーター)、平成25年5月、日本台湾学会第15回学術プログラム、広島大学
8. 日本オセアニア学会英文誌編集担当理事として、People and Culture in Oceania vol. 29の編集を担当し、論文3本、コミュニケーション1本を掲載した。(平成26年3月初めに刊行)

(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)

(調査活動)

- | | |
|-------------------|---|
| 平成22年 8月- 9月 | マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、グアム
(科学研究費補助金課題番号22251012: 後述) |
| 平成22年12月-平成23年 1月 | 台湾(科学研究費補助金課題番号22251012: 後述) |
| 平成23年 8月 | マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、米国
(科学研究費補助金課題番号22251012: 後述) |
| 平成23年12月- 1月 | 台湾(科学研究費補助金課題番号22251012: 後述) |
| 平成24年 8月 | 台湾におけるフィールドワーク(台中、霧社、高雄) |
| 平成25年 3月 | 台湾におけるフィールドワーク(台北、花蓮) |
| 平成25年 8月-9月 | 台湾におけるフィールドワーク(台湾周辺)
(科学研究費補助金課題番号22251012: 後述) |

(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)

- 平成18年度-平成21年度
国立民族学博物館共同研究「脱植民地期オセアニアの多文化的公共圏の比較研究」(研究代表者: 宇都宮大学・国際学部・教授 柄木田康之) 館外研究員
- 平成22年度-平成25年度
科学研究費補助金(基盤研究A・海外学術)「日本を含む外来権力の重層化で形成される歴史認識 - 台湾と旧南洋群島の人類的比較」(課題番号22251012、研究代表者: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授・三尾裕子) 研究分担者

平成二十一〜二十五(2009〜2013)年度の主な研究成果等

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (5/5)

<p>平成二十一～二十五(2009～2013)年度の 主な研究成果等</p>	<p>(学内活動)</p> <p>平成18年 4月 共通教育委員会委員「平22.3まで」</p> <p>平成21年 4月 研究員派遣調整委員会委員「平22.3まで」 FD委員会委員「平23.3まで」</p> <p>平成22年 4月 人権委員会委員「平24.3まで」 教職課程委員会委員「平23.3まで」 図書館・情報(現・図書館)委員会委員「平25.3まで」</p> <p>平成23年 4月 自己点検・大学院委員会委員「平24.3まで」</p> <p>平成24年 4月 就職委員会委員「平26.3まで」 広報委員会委員「平25.3まで」 広報誌編集委員会委員「平25.3まで」 学生相談室運営委員会委員「平25.3まで」</p> <p>平成25年 4月 自己点検・大学院委員会委員「現在に至る」 「人を対象とする研究」倫理審査委員会(委員長)「現在に至る」</p>
<p>平成二十一～二十五(2009～2013)年度の 社会における活動</p>	<p>平成22年 5月 京都文教公開講座 「「第二の人生」を生きる」第1回講師、「海外での「第二の人生」 国境を越えて生活するということ」於：京都文教大学</p>